

ブルーノ・タウト設計による日本における 唯一の建築物である旧日向別邸「熱海の家」

田中 辰明

お茶の水女子大学
名誉教授(生活環境教育研究センター)

柚本 玲

お茶の水女子大学
田中辰明研究室



ブルーノ・タウト設計による日本における 唯一の建築物である旧日向別邸「熱海の家」

田中 辰明

柚本 玲

お茶の水女子大学 名誉教授(生活環境教育研究センター) お茶の水女子大学 田中辰明研究室

日本に憧れて1933年5月に来日したブルーノ・タウトは時局の影響もあり、わが国では希望する職にも就けず、「建築家の休日」と称して主に高崎の少林山達磨寺に籠り、日本文化の紹介を行う著述に励んだ。わが国滞在中1933年に「生駒山の小都市計画」(現在の近畿日本鉄道)を計画したがこれも実施に移されず、旧日向別邸「熱海の家」はわが国に残る唯一のブルーノ・タウトの作品ということになる。タウト設計による部分は木造2階建て、上屋の擁壁を兼ねて造成された人工庭園(建物南側の相模灘側)の地下部分にある。建物の概要は次の通りである。¹⁾

敷地面積	707.38㎡(実測648.26㎡)
敷地形状	南側・相模湾を展望した傾斜地
構造	上屋：木造銅版葺き2階建て(日向の家) 地下：鉄筋コンクリート造1階(タウトの部屋)
建築年月	上屋：昭和10年2月 地下：昭和12年
延床面積	上屋：1階 146.38㎡ 2階 58.67㎡ 計 205.05㎡(約62.0坪) 地下：計 129.89㎡(約39.3坪) 合計 334.94㎡(約101.3坪)

この建物は平成17年に熱海市指定有形文化財に指定され、平成18年には国の重要文化財に指定されている。

日向利兵衛熱海別邸「熱海の家」(熱海市が取得後「旧日向別邸」と呼ばれる)は、昭和8年～昭和11年にかけて日向利兵衛により建築された住宅・ゲストハウスである。携わったのは渡辺仁とブルーノ・タウトの建築家2人と清水組(現在の清水建設)である。ブルーノ・タウトは地下室部分を担当した。建築家・渡辺仁は1938年完成の第一相互ビル(旧第一生命本社ビル)の設計者として有名である。他に横浜ニューグランドホテル(1927年)、銀座和光(旧服部時計店、1932年)、東京国立博物館(旧東京帝室博物館、1937年)等を設計し昭和建築史を彩る多くの作品を手がけた。

傾斜地に建つ2階建ての木造住宅(一期)、清水組により引き続き行われた基礎部(離れ・地下室)とその屋上庭園(二期)、そしてブルーノ・タウトによる、基礎部の躯体を使つての改築(三期)である。三期工事では大工棟梁 佐々木嘉平が手腕を発揮した。

ブルーノ・タウトの設計を手助けしたのが東京中央郵便局を設計した吉田鉄郎である。ブルーノ・タウトは東京には西欧の模倣をした建築が多いと批判し、例外的に絶賛したのが吉田鉄郎設計の東京中央郵便局であった。しかし多くの反対運動にも関わらず、平成21年に取り壊しにあった。ブルーノ・タウトの指示に従い忠実に建築材料を集めたり、設計監理の補佐をしたのがブルーノ・タウトの唯一の弟子と言われた水原徳言であった。

発注者であった日向利兵衛(1874～1939)は大阪の実業家で極めて高い工芸的芸術性のある家具類を販売する「唐木屋」の一人息子として生を受け、語学と幅広い人脈で貿易活動を行い、特にアジア貿易で財をなした。美術、建築に造詣が深く、紫檀、黒檀など高級品の貿易を手がけた。熱海の家は、タウトのデザインした電気スタンドを銀座のミラテス工芸店で買い、そのデザインに共感したという日向氏が、熱海の地にすでに完成していた邸宅の鉄筋コンクリートの下部構造にできた空間(いわば半地下室)に居間と社交場をつくることを依頼したものである。そこには、日本的な素材を使い、桂離宮の面影をも追うことのできるようなデザインが垣間見られる。タウト自身の言葉によれば「全体として明快厳密で、ピンポン室(或は舞踏室)、洋風のモダンな居間、日本座敷及び日本風のベランダを、一列に並べた配置はすぐれた階調を示している」ということになる。依頼に当たっては、タウトを大変尊重したのであろう、手際よく日向利兵衛は上多賀に民家を借り入れてタウトと伴侶エリカに与え(1935年9月9日までここに滞在し設計業務を行った)、工事中は全てを任せ、完成まで現場(地下部)に降りることがなかったと言われている。

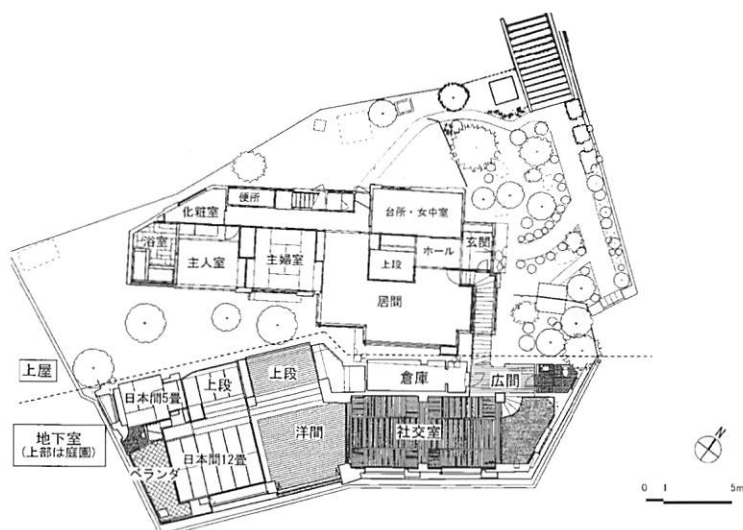


図1 旧日向別邸「熱海の家」平面図（熱海市文化交流課提供）

日向別邸はその後、民間企業（日本カーバイト）の保養所として使われていたが、平成16年に熱海市の所有となり、現在では一般公開もされている。

来日以来建築設計を手がけられなかったタウトにとって、タウトの情念が吹き出したかに感じられる作品である。

旧日向別邸の地下室部分平面図を図1に示す。地下室は大きく分けて手前から社交室、洋間、日本間、縁側の4つになる。それぞれが純日本的な要素と現代的な要素を巧みに組み合わせた構成になっている。この地下室には1階の居間から階段を降りて入る。主にタウトがベルリンで設計した住宅の階段をこのシリーズで紹介してきたが、タウトの階段はいつも趣がある。決して直階段は設計しない。この旧日向別邸においても同様で、階段下部の踏み板を矩形でなく台形に作った設計はベルリンのいくつかの集合住宅と同様の手法である（写真1）。



写真1 1階から地下室に降りる階段

< 社交室 >

地下室部分の社交室には台形の踏み板からなる3段の階段で降りていく。ここには真竹を曲げて作った手すりが設けられている。真竹の先端は階段の踏み板に器用に穴を開け、ここに挿入されている（写真2）。タウトは来日以来、宮城県仙台旧商工省工芸所と関係を持ち、また高崎に住むようになってからは井上房一郎が主宰する井上工芸研究所で工芸の仕事をする。この時の従業員の一人が水原徳言で、タウトにも可愛がられ、自らもタウトを慕い、タウトの唯一の弟子と呼ばれた。旧日向別邸で

もタウトの指示に従い、漆の下塗りなどを行った。アルコーブ東西の一角は細い白岳の張りである。また竹の格子（写真3）、北側の一角は細い竹による張りで表面仕上げなどが特徴的である。この壁には隠し収納庫（写真4）も設けられている。これら竹に関する造作は工芸家・黒田道太郎の作品である。夏向きの社交室は一時ピンボ



写真2 社交室に降りる真竹を使用した階段

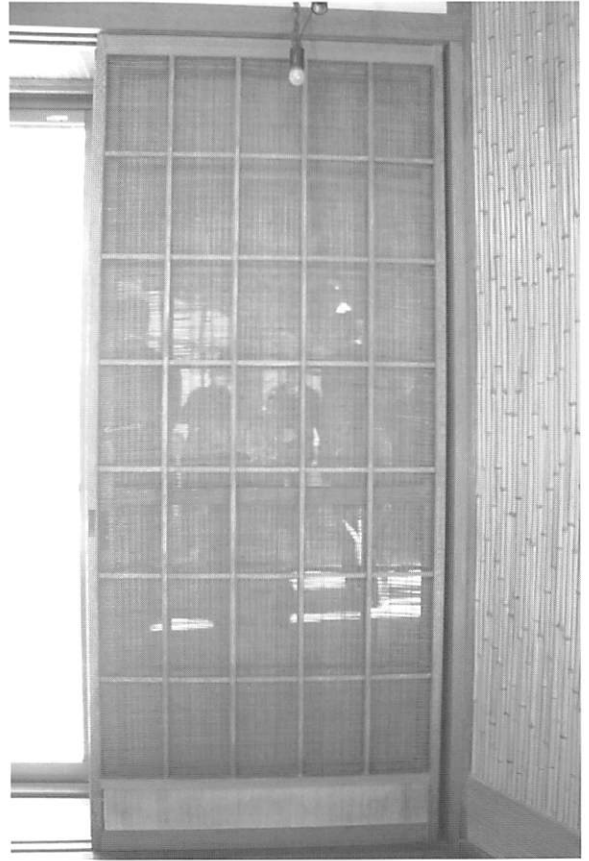


写真3 竹で細工した格子

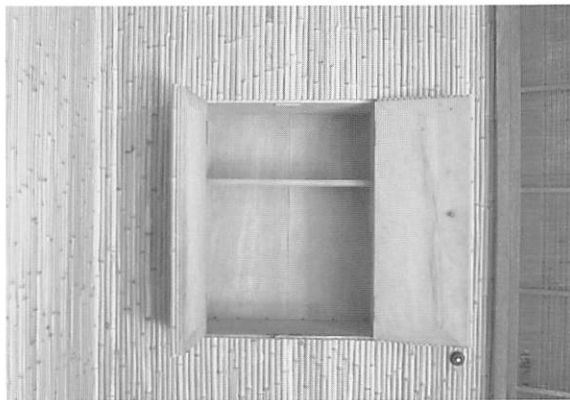


写真4 壁に細工された収納庫

ン室、ダンス室としても使用されていた。日向利兵衛の趣味はダンスと玉突きであった。ここの照明は煤竹につり下げられた裸電球(20W)である。南北二列で北側は奇しくも56個ぶら下げられている。旧日向邸が完成したのは1936年9月で、この年の10月にタウトは失意のうちに日本を立ちトルコへ向かっている。これがタウト56歳の

ときであった。

裸電球はタウトが好んだ日本の夏祭りに用いられた電球から来ている。ドイツの都会では人々が屋外で一緒になって踊るという習慣はない。しかしタウトがジードルングを設計するにあたり、“ベルリンのような都会で田園の生活を送れるように”ということをもっとにジードルングでの共同生活、住民の交流ということを大切にしたい。そしてそのようなことが可能になる場所を設計した。このような場所は本誌で発表したようにファルケンベルクの田園都市、トレブリンのフライエ・ショレのジードルング、アイヒキャンプのジードルングなどに見られる。勿論タウトがそのような場所を設計に盛り込んでも実際に住人がそこで、皆で踊ったかは疑問である。ところが来日し、あちこちで日本の夏祭りを見てタウトはそれに感激したに違いない。特に京都で見た祭りが印象的であったのであろう、そのことを日記に記している。56個の裸電球はタウトの日本の思い出の置き土産であった。この裸電球を吊るすのにも器用に細工された細い黒竹が用いら



写真5 裸電球が吊るされた社交室の天井

れている。あたかも藤の蔓のように見えるが実は竹である(写真5)。社交室の床は檜材とチークの矢筈張り、天井には小幅な桐の板を用いている。

<洋間>

洋間は色彩や段を用いていることなどが、タウト自ら設計し、日本へ脱出するまで住んでいたベルリン郊外のダーレビッツにある旧宅と酷似している。ここは4段あり、蹴上寸法が下段から150mm、165mm、180mm、200mmと変化がある。踏み面も変化があり、下段から350mm、390mm、325mm、360mmと幅が異なっている。ダーレビッツの旧宅ではこの段に座りガラス戸を通してダーレビッツの森を眺めるようにされており、旧日向別邸では熱海の海を見下ろすようにされている。旧日向別邸は傾斜の或る岩盤の上に建設されている。この傾斜の上に段を設けて1mの高低を解決している(写真6)。洋間は色彩と言い、段



写真6 1mの高低がある部分に設けられた段がある洋間

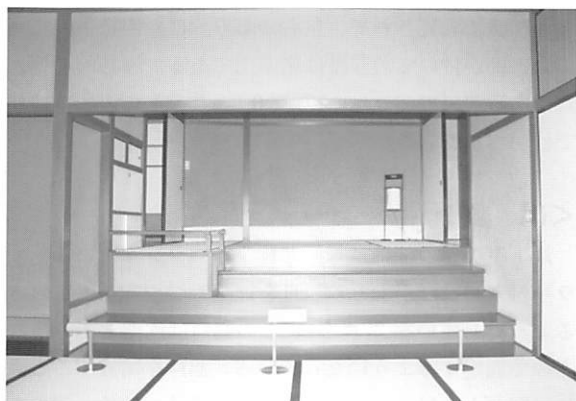


写真7 帳場を思わせる雲囲気のある和室

と言い、アールデコの平面分割的なパターンを日本的に表現している。

濃いワインレッドの絹張りの壁が特徴的である。床は板張り、天井は鼠色の漆喰塗りで間接照明を用いている。

<日本間>

ここは畳敷きであるが、わが国の一般的な敷き方ではなく、あたかも寺院するような敷き方、「四つ井敷き」である。棹縁天井で壁は鶯色の土壁である。柱や鴨居はつや消しの弁柄色(昔インドのベンガル地方のものを輸入したので名づけられた)に塗られている。洋間と同様に上下2段に分かれ、段には台湾檜が用いられている。上段には小さな書見コーナーがあり、折りたたみ式文机があり、和紙にて表装されている(写真7)。この部分は帳場を思わせる雲囲気であり、貿易商であった日向利兵衛の



写真8 和室

希望であった。上段の和室は向かって右側にある四畳半の和室とつながっている。この間にコンクリートの柱と梁があったが、コンクリートの柱を囲むように簡易的な柵が和紙で表装されて、左右にある。この四畳半の和室には書院が付いており壁は聚楽土である。簡易的な押入れがあるが床の間は無い(写真8)。この2つの和室は襖で仕切られている。

<縁側>

地下室の西の部屋は縁側と称するベランダである。ガラリ付きの部戸があり、西日を遮蔽しつつ、通風もできるようにしている(写真9)。この部戸は内開きでつっかえ棒で固定するようになっている。部戸を開放するときには天井から吊り下げられた金具に掛けて解放し通風をはかった。大和天井に床は黒瓦の四半敷きである。壁は白色漆喰塗りである。

ブルーノ・タウトがわが国に残した唯一の作品であるが、なにしろ1936年(昭和11年)の竣工である。ダーレピッツの旧宅同様に傷みも激しい。旧日向別邸にはドイツからもタウト研究家が見学にやってくる。2008年秋に訪問したドイツ建築家協会ベルリン支部長のエドマイア(Christine Edmaier)さん、ドイツのタウト建築の保守を行い多くのタウトに関する著書を持つ建築家ブレンネ(Winfired Brenne)さん、タウト研究家アーヘン工科大学シュバイデル教授(Prof. Manfred Speidel)、ドイツ芸術院院長のシュテック教授(Prof. Klaus Staeck)からも相次いで齊藤榮熱海市長に宛てて旧日向別邸保存と補修の要望書が送られた。ここにブレンネ氏の要望書の和訳を示す。

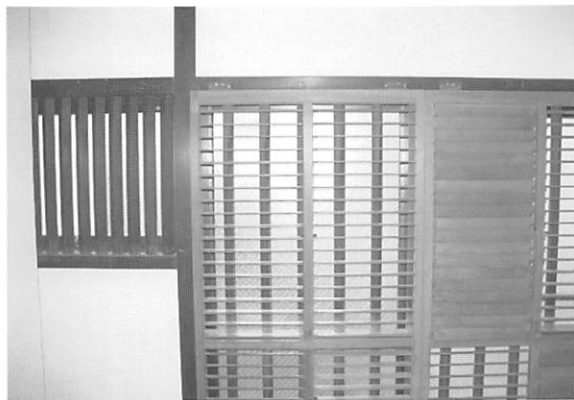


写真9 通風も考慮した部戸

ベルリンにて2009年7月6日

尊敬する熱海市長齊藤榮殿

私は貴殿にこの手紙をベルリンに在住し、長年にわたり建築家ブルーノ・タウトの住宅や団地の再建、修復に従事してきた建築家として差し上げます。2008年7月にベルリンの6件の近代的集合住宅団地がユネスコの世界文化遺産に指定されましたが、その内4件はブルーノ・タウトの集合住宅でした。この顕彰によりタウトの建築に関する業績は20世紀最高のものとして評価されるようになりました。私はブルーノ・タウトのご子息、ハインリッヒ・タウトが1995年になくなるまで、お世話をし、良い友好関係を保っておりました。この数年外国においてもブルーノ・タウトの建築業績に対する関心は著しく上昇しました。トルコでは、ここで1936年から1938年までタウトは生涯の最後の年を過ごしたのですが、最後の作品となった大学や学校建築は現在親愛的にそして記念建築物保護法にのっとり、修復されております。

日本においてもブルーノ・タウトに対する評価は以前から特に高かったのです。タウトは日本で亡命時代の最も幸せな時を過ごしました。タウトは日本で、伝統的な建築と嬉しい出会いを果たし、その最大の賛美者になりました。熱海市が日向邸を建築物の宝として所有する事になりましたが、これはタウトが吉田鉄郎と共に成就させたタウトの日本における唯一の建築作品であります。日向邸の建築芸術的意義はタウトの日本と欧州の住文化の統合であります。十分に理解されているとは申せません。ブルーノ・タウトの邸宅や田舎家屋の建築作品は数多くありませんが、特別な相対的価値があります。建築学的

な根本原理と建築の理想の一目瞭然とした証明があります。イスタンブール近郊のOrtaköy、ベルリン近郊のダーレビッツのタウト自邸と同様に熱海の日向邸は重要な価値があります。2009年に予定されていますがダーレビッツのブルーノ・タウトの自邸の修復はありがたいことにブランデンブルグ州の支援を得ることが出来、この事でタウトが近代的建築家として国際的評価を得たと申せます。

熱海の日向邸もその維持に必要な企画が行われ、必要な処置がなされ、日本の建築文化財として保存され、世界の特に日本とドイツの為に存続するようにしていただければ私の望外の喜びとするところであります。

敬 具

ブレンネ

当然、斉藤市長からも丁寧な返書が各氏に送られた。市長はしっかり保存をしていきたいので、海外からも協力をお願いするとの内容であった。熱海市も他の自治体同様に税収入の落ち込みで財政状況は必ずしも芳しくない。しかも明治時代に多くの有名人が熱海に別荘を構え、それらが現在は熱海市の管理となっている。熱海市としてはどれも重要な建築物で補修の優先順位を付けにくいとしている。このようなこともあり旧日向別邸保存会(ブルーノ・タウト熱海の家)が有志により設立され、保存の活動を開始した。

会長となった中井正勝氏は「旧日向別邸を国民の大切な資産として、当時の状態に復元し、タウトの思い、思想・哲学を肌で感じられるものとして、保存し続けるようにしていきたい。こうした思いの熱海市民が集い「旧日向別邸保存会」を設立し、市民、市行政、国、世界に広く呼びかけている。「保存」すること自体が「意味」である。「保存」の過程がその意味も多様化し、様々な分野に波及し、歴史、文化、教育を養い培う。「保存」を通して築かれる交流が、市民の力となり誇りとなって育ち未来をつなぐ」と語っている。

この会の目的は次のようである。「本会は、指定重要文化財・旧日向別邸(ブルーノ・タウト熱海の家)の文化財価値を知らせしめつ活動とする傍ら、長期保存とそれに関する基金の提供を呼びかけ、観光都市熱海の芸術・文化の発展に寄与することを目的並びに活動とする。(旧日向別邸旧日向別邸保存会会則 第2章)より」。旧日向別邸保存会はブルーノ・タウトに関する講演会などを定期

的に実施し、まず地元熱海市民に旧日向別邸保存の意義を理解していただくという地道な活動を熱心に推進している。

<参考文献>

- 1) 旧日向別邸 中井正勝
- 2) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：ブルーノ・タウト 日本の芸術、春秋社(1950)
- 3) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：ブルーノ・タウト 日本の建築、春秋社(1950)
- 4) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本の家屋と生活、春秋社(1950/12)
- 5) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：ブルーノ・タウト 建築・芸術・社会、春秋社(1951)
- 6) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本美の再発見増補改訂版、岩波書店(1962)
- 7) エベネザー・ハワード、長素連訳：明日の田園都市、鹿島研究所出版(1968/7)
- 8) Rosemarie Franz: Der Kachelofen Entstehung und kunstgeschichtliche Entwicklung vom 9) Mittelalter bis zum Ausgang des Klassizismus, Akademische Druck- und Verlagsanstalt, Graz Austria(1969/1)
- 10) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：建築とは何か、鹿島出版会(1974/11)
- 11) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本・タウトの日記1933年、岩波書店(1975/9)
- 12) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本・タウトの日記1934年、岩波書店(1975/10)
- 13) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳：日本・タウトの日記1935～36年、岩波書店(1975/11)
- 14) Bruno Taut: Bruno Taut(1880-1938). Ausstellung der Akademie der Künste vom 29. Juni bis 3. August 1980, Ausstellungskatalog, 128(1980/1)
- 15) 水原徳言: Bruno Taut年表, 群馬県工業試験場(1987/6/1)
- 16) Bruno Taut著, Manfred Speidel編: Ich liebe die japanische Kultur! Kleine Schriften über Japan, Gebr. Mann Verlag Berlin(2003/8)
- 17) Annette Menting: Max Taut Das Gesamtwerk, Deutsche Verlags-Anstalt(2003/10)
- 18) Winfried Brenne: Bruno Taut, Meister des farbigen Bauens, Verlagshaus Braun; Auflage1(2005/5)
- 19) 田中辰明, 楠本玲: ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の集合住宅 Siedlung: ジーデルンクにおける建築設備, 日本建築学会学術講演梗概集(2006/9) 1115-1116
- 20) 田中辰明, 平山積久, 楠本玲: ブルーノ・タウトにより計画された住宅と暖房設備, 設備設計, 42(11)(2006/11) 8-18
- 21) 田中辰明, 楠本玲: ブルーノ・タウトがベルリンで設計した集合住宅, 社団法人日本家政学会大会研究発表要旨集, 59(2007/5) 244-244
- 22) Winfried Brenne: Siedlungen der Berliner Moderne, Verlagshaus Braun(2007/6)
- 23) 田中辰明, 平山積久, 楠本玲: ブルーノ・タウト(Bruno Taut)の集合住宅ジードルンク(Siedlung)における建築設備(その2), 2007年度日本建築学会学術講演梗概集(2007/8) 1425-1426
- 24) Manfred Speidel: Bruno Taut, Ex oriente Lux Die Wirklichkeit einer Idee, Mann(Gebr.) Berlin(2007/8)
- 25) 田中辰明, 楠本玲: ブルーノ・タウト設計による円形住宅「チズカバー」, 建築仕上技術, 34(403)(2009/2) 49-53
- 26) 田中辰明, 楠本玲: ブルーノ・タウト設計によるオンケル・トムズ・ヒュッテの住宅団地, 建築仕上技術, 34(404)(2009/3) 63-66
- 27) Landesdenkmalamt Ber: Siedlungen der Berliner Moderne, Berlin Modernism Housing Estates, Braun Publishing(2009/7)